



岡地文子全集

第四卷

新潮社

第九回配本(全十六卷)

円地文子全集 第四卷

定価三三〇〇円

昭和五十三年五月十五日 印刷  
昭和五十三年五月二十日 発行

著者 円地文子 © Fumiko Enchi, Printed in Japan 1978.

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

郵便番号一六二 東京都新宿区矢来町七一

業務部 東京(〇三)二六六一五一二

編集部 東京(〇三)二六六一五四一一

振替 東京四一八〇八番

印刷所 東洋印刷株式会社

製本所 神田加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。  
送料小社負担にてお取替えいたします。

円地文子全集 第四卷 目次

莓	仮面世界	噴水	さんじょうばっから	めくら鬼	ある江戸っ子の話	夫婦	しゅん	小さい乳房
---	------	----	-----------	------	----------	----	-----	-------

140	111	99	84	73	65	57	49	7
-----	-----	----	----	----	----	----	----	---

化 性  
樹のあわれ  
ある女性の半生  
白い野梅  
ある夫婦の話  
秘 筐  
生きものの行方  
墨 絵 牡 丹  
京 洛 二 日

279 267 235 204 197 182 175 162 150

解題	土蔵の中	雪の高原	谷中清水町	土地の行方	幻の島	心中の話
----	------	------	-------	-------	-----	------

368	360	352	332	312	300	291
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

田地文子全集 第四卷





## 小さい乳房

### 一

女の小説書きというものは、現代の日本では男の小説書きよりも専門外のよろず屋のような役割をジャーナリズムから余計に引受けさせられるものだ。身上相談の回答などというのもその一例であるが、その他にも、新聞の政治面や社会面を賑わすような出来事があると、特にそれが女性に縁のあることなら、必ずといっていいほど意見を求められる。いや、婦人席？ でない出来事についても、現代のジャーナリズムは必ず六歌仙の中に小町が一人加わっているように各界の意見なるものの中に、女性代表を一人入れて置かなければ気がすまないらしい。男の小説書きにも勿論そういう役は廻って来るのだが、男子席は職業別も人数も多いだけに、社会評論家、政治評論家、文芸評論家など、評論家だけでも幾種類にも分れているので、回答者は強か

作家を要しない場合が多いらしいが、女となると社会で仕事をしている人の数が少ない上に、職業も専門化しすぎて、ジャーナリズムと縁のない向きが多いためか、世間の裏や人情の反覆を筆にする女小説書きは一応、世間に起る出来事について、返事の出来る当意即妙の知恵を持っていると買い被られるわけである。いや、もう一つその底を潜って考えれば、お前達はどうぞせ、他人の垢と自分の垢をまぜ合せて、清潔でない練りものをこしらえて売るのが商売なのだから、こんな種たぐいに対してはどんな反応を示すか、試験の答案を出すことも、筆で食っている作家商売の一つの義務であろう、という意地悪さもひそんでいるのかも知れない。

昨年の秋、生れたばかりの嬰兒を病院からさらって行って、世間を騒がせた弁護士の内縁の妻が熱海で逮捕された時にも、それに対して意見を求める電話や訪問がいくつあった。

K女が石婦いしむすめであったこと、前夫のアメリカ人との場合にも養子を貰って子供のない家庭の隙間をふさごうとしていたこと、そうして、前夫の死後内縁関係になっている少壮弁護士との間を恒久的なものにして行くために、偽装妊娠から嬰兒誘拐にまで発展した経緯いきさつを私は、それらの人の口から、活字で読むよりさきに精しく知ることが出来た。

手もとに幼い孫がいる関係もあって、私には生れたばかりの幼児を奪われた産褥の母親の動盪した気持が強く心に触れていたので、その幼い生命が兎も角も無事に庇われていたことにはほっとした。従ってK女に対しても、いつかの正樹ちゃん殺しの本山に感じたような凶悪無慚な憎しみは覚えなかつたが、他人の子供を自分の子にすりかえようという骨の折れる手品をうまくやりとげるのには、K女とその母親のとった方法があまり稚拙で、その点が馬鹿らしく思われた。

「偽装妊娠を本当の妊娠に見せ通して、他の人の子供を自分の子供にしてしまう計画を立てるとすれば、私なら東京のような大都会でないとこの産婆さんと結託して、親知らずで養子にやりたいような秘密な赤ん坊を予め用意して置きます。東京のまん中の大病院で、突然赤ん坊が消えてなくなるようなことが起れば、大騒ぎになるのは解り切っているんですもの……。その点、Kという女の人は、一応頭も悪くないというけれども、知能に欠陥があるんじゃないか

いでしょか」

私は、その事件を討議するために開かれたある婦人雑誌の座談会の席上で、私案の「偽装実子」説をしたり顔にのべたりした。同席者の大部分は私の意見と大同小異で、自分が子供をほしがっている癖に子供を奪われた親の悲しみに思い及ばない鬼子母神的な偏執や方法の愚かさについて批難したが、その中に一人、私のところにこの座談会の交渉と一緒に事件のデータを集めて持って来た若い記者の笹村だけは、最初から最後まで、K女の行為の弁護士であった。彼はK女が三十を過ぎて子供がなく、石婦であることを諦めようとしても諦めきれず、内縁の弁護士との愛情を長くつづけて行くにはこの方法をとるより他なかつた情状を、思いせまった女心という風に解釈して、頻りに同情するのである。彼の同情が一座の誰からも共感されないと、彼はひどく困って泣き出しそうに眼をしばだたきながら、

「弱ったなあ……そうかなあ……僕は甘いのかしら……」

と言ったりした。

「僕は女の方には母性的な本能があるから、このKさんの場合に、むしろ僕たちよりも同情を寄せるのではないかと思っていたのですが……」

「同情しませんよ」

と私は甚だ冷淡に言い切った。女が女の行為に対して甘い眼を持つなどというのは大嘘で、むしろ、舞台裏から背

後姿を見て、アラを探しているような意地悪さを自分自身持っていることを私はちゃんと知っている。

「それはね、この人がもっと生活に困っているとか、夫の方に子供をほしがる気持が強く、どうしてもこんな無分別をやらなければならなかったとかいうのだと、もっと共感を動かされますけれどね、この程度の環境じゃあ異常性格というより他ありませんわ」

「そうですとも……夫婦の中に子供があることは自然ですけれども、それがなくても、別のもので二人の愛情が育てられないというわけはありませんものね」

私の言葉をひきとった女流教育家のS女史はそれから数分間、母性愛を社会愛の方向へ押しひろげて、有益な活動をした某夫人を例に挙げて話しつづけた。私も行きがかり上、S女史の論旨に尤もらしく相槌をうっていたが、そのうちに、いつか私の内部には窪みだらけの乾いたコンクリート道路のようなものが泛んで来て、その果てしなくつづく索漠とした味気なさに気が滅入りこんで行った。S女史の演繹している論旨は私の言葉から派生したものであって、人間の細かい感情の襞を見集めるのに適さないこういふ会合の定石として、一応誰がきいても批難することの出来ない社会道徳の線に事柄を統一して行くのは妥当でもあり、結論が簡単に出て便利なのでもあった。こうした会合の目的が事件に対する公約数の多い答えを求めている以上、出

席者は世間に通用している常識を踏み破らない程度にちょっと薬味の利いた答えをするのが普通である。

K女の場合にしても母性本能を他の利他的行為に置きかえるというS女史の回答は筋が通っているし、S女史自身も疑いなくその持論に自信を持っているので、話し方にもコクがあつて司会者は満足したらしいのに、笹村だけはいつまでも納得が行かないらしく、女性に対する甘さをからかわれていた。

私もその場にいた他の人々と同様に、はじめのうちは笹村を冷かすようなことを言っていたが、座談の間にそれが一つのおも立つた線になって発展して行くS女史の主張に堪えがたい味気なさを感じると同時に、いつかK女の嬰兒誘拐を母性本能の悲劇と見ている笹村の主張を、おめでたいとか甘いとかで片づけてしまえないものがあるような気がし出した。

私はK女を異常性格だと割切ったことを言った自分に、いつか後悔を感じ出していた。それは、女が何か意表に出た行為をやつてのけると直ぐ月経や母性本能に結びつたがるお粗末な合理主義への反撥であつたのだが、異常性格という枠の中へ彼女をぼんとほうり込んですましていられるとすれば、私は小説など書く必要はない筈だつたということが、だんだん時が経つにつれて解つて来た。K女の行為を母性本能の悲劇と見るのも、異常性格と片づけるのも、

程度から言えば同じ原色的な色わけである。いや、同じ単純化なら、人間を簡単に狂人扱いするよりも、子を生めない女のやる瀬ないあがきと見る方がずっと複雑な内容を孕んでいて、小説書きにふさわしい見方かも知れない……

帰りに雑誌社から送ってくれる自動車に乗ったあと、同じ方向なので途中の駅で降りるといふ笹村と二人になった時、私はそのことを言った。

「私には他人を大根か蕪みたいにざくざく切ってしまう粗い神経があるんですよ。その時はちょっといい気持だけれど、あと味は悪いですね。さっきKという女の人を異常性格だなんて言ったのもそういう癖が出たんです。私は犬が西向きや尾は東というような考え方を、小説を書く敵だといつも自分に言いきかせているのに、時々自分もくるりと一まわりして、犬が東を向けば尾は西を向くと平気で言っているようなことがあるんですよ。逆な方を向いても結論は同じだということがわからないらしいのね」

私の言い方を面白がって、笹村はクッククツと咽喉をふくらまして鳩のような声で笑った。彼は前髪を斜めに額へ掠りつけている髪の様子から、まだ三十にはなっていない……恐らく結婚もしていないのではないかと思われる瘦せ型の青年である。私は前にも社の用で訪ねて来た彼に門口で一、二度応対したことがあるが、長く一座したのは今日が

はじめてである。

「僕は実は女の先生達のうちで黠なくとも僕の意見に一人や二人賛成な方があると思っていたんです。いや、しかし、Aさんがそう言って下さると少し元気が出ました。子供の生めない女がどんなに子供を欲しがるかということ、実は僕は実地で知っているものですからね。……つまり、僕は自身、そういう女を母親にして、今の女房と結婚するまでほんとうの母だとばかり思って育って来たんです」

話しているうちに笹村の顔からだんだん普段の明るさが消えて、陰鬱な影が眼や唇のあたりに滲んで来た。

「まあ……そうですか。じゃあ……あなたの先刻のお話には裏打ちがあつたわけね」

と私は言った。

「そうしてそのお母さま……今も一緒にいらっしやるの」  
「いや、死にました。一昨年、僕が結婚して間もなくでした。狭心症っていうんですか。友達と旅行に出ていて突然発作が起つて、道で倒れたんです。僕が駆けつけた時はもうすっかり死に顔に変わっていました。あとで考えると、病気を隠していたらしいんで、自殺だという見方もあるわけですよ。……」

笹村は自殺という言葉に驚かされて眼を睜った私の顔をそのまま見つめて、

「いや、黠なくとも僕は母は自殺したのだと思っています」

と言った。彼の降りる国電駅がすぐ前にあった。「一度ゆっくりうかがいたいわね……あなたのお母さんのお話」

と私が言うと、彼はうなずいて、

「僕もきいて頂きたいと思っています。近いうちに時間をつくって下さい。母もきくと、僕がAさんにこの秘密をお話しすることを喜ぶと思いますよ」

と言った。

笹村と別れたあと、私は自宅までの自動車の中で、笹村のK女に対する見方を甘いとかからかった自分こそ、人間を一つの枠に押しこんで、けるけるしていられるちやちな観念主義者であったと後悔した。笹村と一緒にの車に乗ってよかった……二人になってから、自分があんな迷惘をしなかつたら、笹村も恐らく、ああいう間わず語りをはじめはしなかつたらうと思われた。

次にしるす物語は、それから数日後に笹村が私の家を訪ねて来て、三、四時間に涉って話して行ったことによつたものである。

私は彼の帰つたあと、殆どそのまま引きうつすようにノートに彼の話を書きとめていたが、そんな間にも、一歳半を過ぎたばかりの私の幼い孫が時々ちよこちよこ書斎へ入つて来て灰皿を持ち上げたり、花瓶の花を取ろうとしたり、

悪戯をするので、適度に叱言を言つたり、甘えさせたりすることで、私はその度にノートの手を止めさせられた。

この子は今こうして片言を言つたり、動きまわつたりすることが大分赤ん坊ばなれして来ているけれども、記憶というものをほんのまだ一部分しか持っていない。火の傍へ寄ると熱いということや、食物とそうでないものとを、見わけるとは少しずつやつと解つて来ているけれども、「お父ちゃま」「お母ちゃま」などと片言に言つていても、父母や祖父母に今別れることがあつても、それは他人が話さない限り彼女の幼い記憶の襞には止まらないことなのである。仮にこの子が今の年でどこかの家へ貰われて行けば、もの心づいて来た頃に、父と呼び母と呼び習わされる男女をそのまま父であり母であると信じることに疑いはない。現に笹村吉朗はそういう運命のもとに、人生の第一歩を踏み出し、その血筋の縁のない母を母と信じきつて、二十五歳を過ぎるまで無事にその少年期、青年期を過して来たのである、いや無事だというのは彼の側からだけの言い分、彼を育てた笹村りつ女の側から言えば、それは苦痛と愉快、悲愁と歓喜の情緒が交錯して、シンフォニーのような振幅の大きい共鳴音を内部に織りなしていた歳月に違いない。それは笹村と今の妻の結婚によつて断絶し、りつ女はわれとわが生命を病氣と見せかけた自殺で終らせたのである。勿論りつ女の死因は狭心症の発作によることは事実であ

ったが、その発作は前にも一度起ったことがあり、その時りつ女は医師から、過労になるような労働や旅行をとめられていたにかかわらず、そのことを笹村には言わずに、前よりもよく出歩くようになり、最後の旅行も茶の湯の友達連れ四、五人で、紅葉時に京都の名苑や茶席を見物に賑やかに出かけて行つたのであった。

あとで友人の一人に精しい様子をきくと、りつ女はその旅の間中、いつもよりずっと陽気で、宿で食事のあと三味線を取りよせて、長唄の「高尾さんげ」の一節を艶のあるさびた声で歌って聞かせたりしたそうである。笹村はその話をりつ女の一歩親しかった殿村はまからきいた時、自分のまだ小学校へ行かない幼少のころ、りつ女が添い寝しながら口三味線で教えてくれた、

チャン もみじ葉アの、ツンテンチン あおばアにい  
レイゲエるウウなつウ木立ち チントンチャン は  
るウはア むかアレイにい なりけエらアし……

という「高尾さんげ」の中の節まわしがそぞろに口にのぼって来て、思わず涙が臉に溢れ出るのをどうしようもなかった。

りつ女は、養生次第では或いは、死期をずっと遠くへ押しやることの出来たかも知れない血管の病気を自覚してい

ながら、葉も飲まず、日常生活より遙かに運動量の多い旅行などをわれから進んでして、死を自分の方へ招きよせていた。そうして結果においてはそれが死の前日に當つた夜に、久しく手にふれたこともない三味線を取りよせて、「高尾さんげ」を語つたという。

笹村は母がその夜、さ下りの「もみじ葉」のいくざりを歌いながら、きつと、遠い昔の日に添い寝している自分の小さい手に胸の乳房をまさぐられながら、口三味線で歌っていた時のことを心に泛べていたに違いないと思つた……

母はよく僕の手をとって懐ろへ入れさせました。さあ、いくつぐらいの時のことでしょう。記憶というものは、ずっと一つ環境が長くつづいている場合、周囲のもの過去の語る言葉によって補足されて行きますから、なかなかいつとはつきりは分らないものですが、兎も僕自身「もみじ葉」の節や言葉をそのまま覚えてしまったのですから、数え年の五つぐらいからさきではないかと思われるのです。

今考えてみると、母はその頃三十五、六になっていたのでしょうが、僕の記憶によると、顔色は少し黄みがかつているのに、着物にかくされた部分の肌の色は、うで玉子の白身のように真白くすべすべして、形のよい胸に小さい乳房が日本校の実のように、ほつ、つり、小さい乳首をほませていました。僕は勿論、牛乳で育てられて母の乳房か

ら乳を吸ったことは一度もなかったのですが、母は僕に自分をほんとうの母親として感じさせたかったのか、努めて僕と添い寝をし、僕の小さい手を乳房にさわらせるように仕向けました。

僕の母の家は堀留に近い裏通りにある中所の生地間屋でしたが、母は一人娘で、遠縁の次男を養子に迎えました。母は評判の器量よしで、やさしい気質なので養子の父との仲もよく、父自身も店の仕事をてきぱき片づける敏腕家だったので、しっかりものの姑も彼には一目置くくらいでした。古い間屋町の習慣で、早く跡取りがほしいと家中で願っているのに、三年五年とたっても母には妊娠する様子が見えません。婦人科の医師に看て貰った結果、父の方には何の異状もなく母の方が妊娠の出来ない身体だと解ったのです。父は母を愛していたので、子供がなくてもいいのではないかと、そのことに拘泥こたねらぬ風を見せましたが、やっぱりそういう事実を知ったことは男の心に隙間風を吹きつけたのか、取引先の附合いでよく遊びに行く日本橋の若い芸者との間に関係が出来て、その女は妊娠しました。父の考えでは、養子のことではあり、母に遠慮してそっと隠して置くつもりだったのですが、母の従兄で同商売の津田保太が年も父と略々同じくらいで気の合う友人だったので、このことを聞き知ると、

「そりゃ、りつ子さんに話して、出来ればはじめっから本

家の子にして育てる方がいいじゃないか。君だって笹村の家と満更血がないというわけじゃなし、自分の子供がどうせ出来ないとするば、りつ子さんとしても、君の子供を引きとって育てるのが一番いい方法だと思うよ。二号の方に子供があつて、後でごたごたするよりも、出来ればさっぱり手を切つて子供を貰つちまうことだな」

と忠告してくれました。父としてもその相手の女がひどく気に入っているというほどでもないのに、母さえ承知してくれば手切金を出して、子供だけ引取ることに異存はありません。

津田からその話をきいた時、母は悲しくて、泣くまいとしても泣き声が齒から洩れて、ヒーヒー笛のように鳴ったといひます。でも、父を愛していたし、自分には一生子供が恵まれないのだと思うと、津田の忠告に従うのが一番いい方法に思われました。母の母はその前年に亡くなつたので、津田が承知していてくれれば、立入つて苦情を言う親類はないのです。

「私、どうせ自分の子にして育てるのなら、店のものにも、私の子供だと思わせたいわ。ばあやと中井さん（支配人）さえ承知していてくれれば、私、ちゃんとうまくやれる自信があつてよ……あなたのためにも、その方がいいと思うわ」

りつ子は真顔で夫の茂雄に言いました。やがて二人の間



の相談には、津田と中井と、りつ子に子供の時からついていた老女中のたけとが加わって、りつ子は肺尖カタルの氣味があるという理由で、しばらく伊豆の下田に近い貸別荘に静養に行くことになりました。

生み月の近づいた頃、芸者の関弥（僕は実母について、未だにその本名を知らないのです。そうしてそのことに僕は別に悔いを感じていません。笹村りつ子の他に母親というもののあることに、僕は抗議したい氣持でいます）はその土地へ来て、世間体は母の従妹という触れこみで同居し、その家で産をすませました。関弥はその時まで十九（数え年）で、初産のことで陣痛も烈しく時間も長くかかったのでも、お終いには声を上げて泣きさけぶのを、りつ子は抱きかかえるようにして、一緒に床の上のころがったり、産婆と一緒にいきみ声を立てたりして、ほんとうに半分は自分が子供を生むような骨折りをした後、兎も角無事にうぶ声を上げさせたのでした。ちょうど、九月のはじめの残暑のきびしい頃で、一昼夜床の上で身体をのたうたせていたのでも、関弥の背中一面、あせもが浮き出したそうですが、りつ子の方も、首筋や脇の下にあせもの出来たことでは生みの母の関弥に劣らなかつたといえます。

「この坊っちゃんはお嬢さま（たけは、りつ女が三十過ぎても二人の時にはそういう呼び方をしていたそうです）のほんとうのお子さんですよ。お産の時からあんなにしがみつかれて、一緒にうんうん唸って上げて生れたのですもの……」

とたけはまだ眼もあかず、肉の塊りのようにぶよぶよと赤い嬰兒を毛糸のおくるみにくるんで、りつ女にさしつけながら言いました。関弥はお産をすませて一週間ほどすると、近くの温泉宿へ移って行き、その後で、子供の生れたことが東京の自宅に知らされて、茂雄と茂雄の実家の兄嫁がやって来ました。

「まあまあ、はじめてのお産が男のお子で、りつ子さんお手柄でしたね」

と兄嫁は言って、まだ床の中にいるりつ子の傍の小さい布団に寝かされている嬰兒の顔をのぞきこみました。

「ああ、こりゃ茂雄さんよりも、りつ子さん似だわ。男の子は女親に似るのが運がいいというから、きつといい跡取りになりますよ」

兄嫁がお世辞半分であろうが、そう言った言葉を、りつ女は心底からうれしくききました。関弥の顔はりつ女に似たところのある細面に眉根のひそんだところも、姉妹といつても通るほどでしたから、関弥の子がりつ子と面ざしが似ているというのも強ち不思議ではないのです。茂雄は何となく、くすぐったい顔つきで女達の話をきいていましたが、兄嫁とたけのいなくなつたあとで、りつ女をあらためてしっかりと抱きしめて、